

第七講 古今著聞集

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

刑部卿敦兼は **A** のよにくさげなる人なりけり。その北の方ははな

やかなる人なりけるが、^{ごせち}五節を見はべりけるに、とりどりにはなやかなる

ひとびとのあるを見るにつけても、まづ^①我がをとこのわろさ心うくおぼえ

けり。家に帰りて、^②すべて物をだにもいはず、目も見あはせずうちそばむ

きてありければ、しばしはなに事のいできたるぞやと心もえず思ひるたるに、^③5

しだいに厭ひまさりてかたはらいたきほどなり。^③ さきざきのやうに一所に

もる **B**、方をかへて住みはべりけり。ある日、刑部卿出仕して夜に入

りて帰りたりけるに、出居に火をだにもとさず、装束は脱ぎたれ **C**

たたむ人もなかりけり。女房どももみな御前のまびきにしたがひてさしい^{*}

づる人もなかりければ、せんかたなくて車よせの妻戸をおしあけてひとりな¹⁰

がめるたるに、^{かう}更たけ夜しづかにて、月光、風の音、ものごとく身にし^{*}

みわたりて、^あ人のうらめしさもとりそへておぼえけるままに、心をすまし

て筆策^{ひちりき}をとりいでて、^{*}時のねにとりすまして、

ませのうちなる白菊も

うつろふみる **D** あはれなれ

我らがかよひてみし人も^⑥

かくしつつかそかれにし^④か

とくりかへしうたひけるを、北の方聞きて心はやなほりにけり。それよりこ

とになからひめでたくなりにはけるとか E。優なる北の方の心なるべし。^⑤

(注) ※五節：朝廷の行事で「五節の舞」のこと。

※まびき：目くばせ。

※更たけ：夜が更けて。

※箏策：雅楽で使われる管楽器の一つ。

※時のね：その季節にふさわしい調子。

問一 空欄Aに入れるのに最もふさわしい語を次の中から選べ。

- 1 みめ 2 心 3 歌 4 ひと 5 楽

問二 傍線部①・③の現代語訳として適当なものを、次の中から一つずつ選べ。

①「我がをとこのわろさ」

- ア 自分の夫の意地の悪いさま イ 自分の夫の無風流なさま
ウ 自分の夫の地味なさま エ 自分の男性運の悪いさま
オ 自分の夫の容貌の醜いさま

③「かたはらいたきほどなり」

- ア 近くに寄ってくるのも嫌なほどだった
イ 脇腹のあたりが痛むような感じだった
ウ はたで見えていても気の毒なほどだった
エ いつでもそばにいてあげたいと思った
オ いくらか滑稽に感じられるほどだった

問三 空欄B、Eに入れるのに最もふさわしい助詞または助動詞をそれぞれひらがなで記せ。ただしB・Eは一字、C・Dは二字。

B

C

D

E

問四 傍線部②「すべて物をだにもいはず」をわかりやすく口語訳せよ。

問五 傍線部①・②の「人」はそれぞれだれを指しているか、本文中の語を抜き出して示せ。

①

②

問六 傍線部④「かれ」には、二つの動詞が掛詞になっている。それは次のどれか、二つ選んで記号で答えよ。(下記の動詞は終止形で示してある)。

- ア 枯^かる イ 借^かる ウ 狩^かる エ 離^かる オ 駆^かる

問七 傍線部⑤の「優なる北の方の心なるべし」はどのようなことについていっているのか。次の中から最もふさわしいものを選べ。

- 1 刑部卿の世話をしない女房に心をいたためて自ら身のまわりの世話をしたこと
- 2 刑部卿について心を許さないプライドを持っていたこと
- 3 刑部卿をうとましく思っていたが、その心情をあらわした歌を聞いて心をひかれたこと
- 4 刑部卿の筆策と歌のすばらしさにひかれて刑部卿と結婚したこと
- 5 刑部卿がつらくあたっても歌によってみずからの心をなぐさめ刑部卿に仕えたこと

問八 「古今著聞集」と同じジャンルに属する作品を次の中から二つ選べ。

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|-----|---|-------|---|-------|
| 1 | 古今和歌集 | 2 | 経国集 | 3 | 今昔物語集 | 4 | 和漢朗詠集 |
| 5 | 雑談集 | 6 | 万葉集 | 6 | 貫之集 | | |

第七講

説話

【平安】

日本靈異記 りよつじ

景戒

822

最古の仏教説話。漢文体。

三宝絵詞 さんぼうえことば

源為憲 ためのり

984

仮名書きの最初の説話。
仏教説話。

今昔物語集 こんじやくものがたりしゆう

源隆国？

12世紀初
(平安後期)
1100年頃

仏教・世俗説話。最初の二
行が、結論になるとき
が多い。和文体と漢文体が
入り交じった和漢混交文。
三二卷。天竺(インド)・
震旦(中国)・本朝(日本)
の三部構成。

江談抄 こうだんしやう

大江匡房 まさふさ

12世紀初

古本説話集 こほんせつわしゆう

不明

12世紀初

上巻は和歌説話。下巻は
仏教説話。

打聞集 うちきぎ

不明

12世紀初

仏教説話。

宝物集 ほうぶつ

平康頼 やすより

12世紀末

仏教説話。

【鎌倉】

撰集抄 せんじゅうしやう

西行？

12世紀末

仏教的説話。

古事談 こじだん

源顕兼

12世紀初

仏教・世俗説話。

発心集 ほっしんしゅう

鴨長明 かもちやうめい

13世紀初

仏教的説話。

宇治拾遺物語 うじしゆい

不明

13世紀初
(鎌倉初期)

鎌倉時代を代表する説話。
一五卷。一九七話。

閑居友 かんきよのとも

慶政

13世紀初

十訓抄 じゅうきんしやう

六波羅二藤左衛門

1252

世俗説話。三卷。

古今著聞集 ここんちやもんじゅう

橘成季 たちばなのなりすえ

1254

世俗説話。二〇卷。

沙石集 しゃせき

無住

13世紀末

仏教説話。一〇卷。

雑談集 ぞうだん

無住

14世紀初

— げに

— げなり

— げなる

形動

— かに

形動

あいなし

あぢきなし

うし

うたて

うとまし

こころうし

こころづきなし

むつかし

不快である・不愉快である

(マイナスイメージ)

こころうし【心憂し】

① つらい

② いやだ

③ 情けない

すべて——打消

まったくくらない

副助詞

だに

類推(〜サエ)

軽いものを挙げて重いものを類推する「まして」を探す。
なければ「まして」以下を補ってみる。
ただ入試では「まして」以下を補えという問題は出題
されないから安心してくれ！

・田舎世界の人**だに**見るものを、

(〓田舎に住む人でさえ見る、へまして都の人なら絶対
見るのに)

最小限の願望(セメテ〜ダケデモ)

最小限の願望の意味のときには、「だに」の下に意志・
命令・願望・仮定がくることが非常に多い。

・御文を**だに**物せさせたまへ命令形

(〓せめて手紙だけでもお書きなさい)

さへ

添加(〜マデモ)↓(Aに加えて)Bマデモ

・空のけしきなどさへ、あやしうそこはかたなくを
かしきを

(〓地上の景色に加えて)空の様子などまでも、どこと
いうこともなく趣深いものを)

「や」と言ったら

疑・反（係助）か詠嘆（間投助）

いとふ【厭ふ】

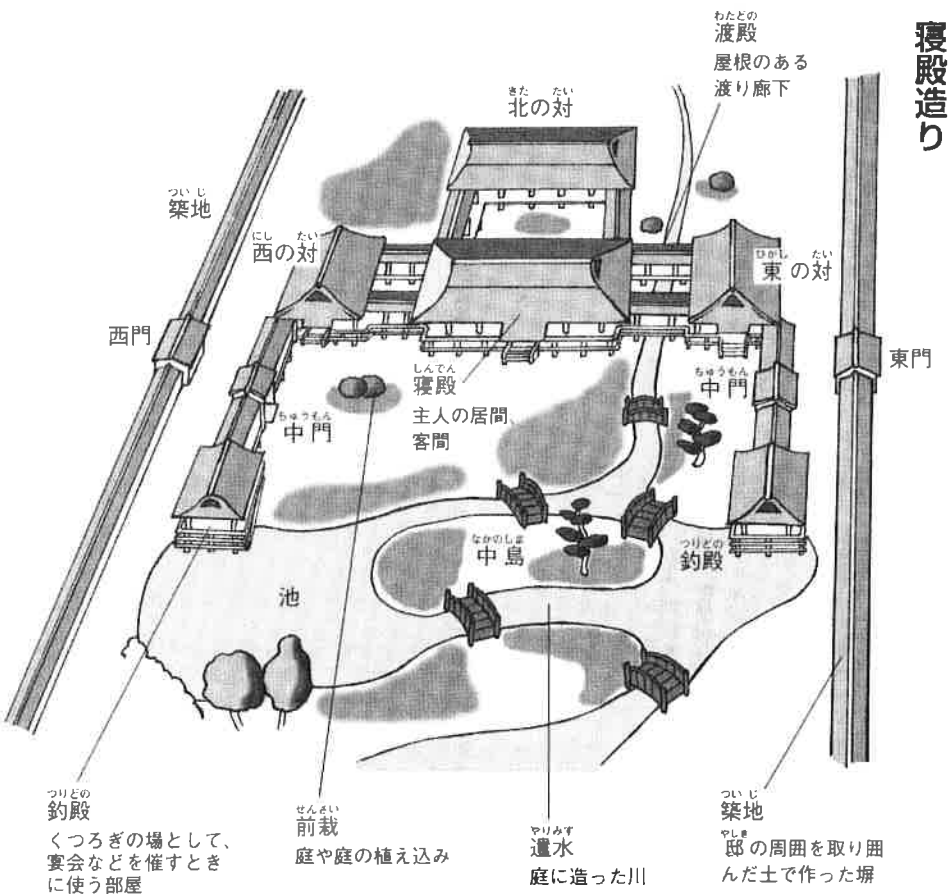
① 出家する

② 嫌う

かたはらいたし【傍痛し】

①（傍で見ている）気の毒である・みつとも
ない

②（傍で見ている）きまりが悪い



女房
侍女

えらい人(中宮など)に仕える女性

あぢきなし

あへなし

いふかひなし

よしなし

わりなし

どうしようもない

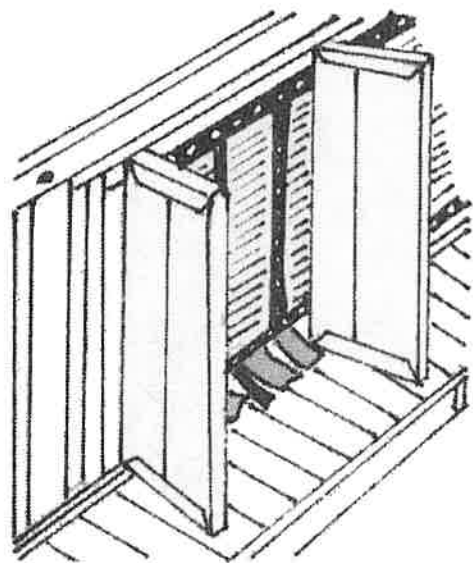
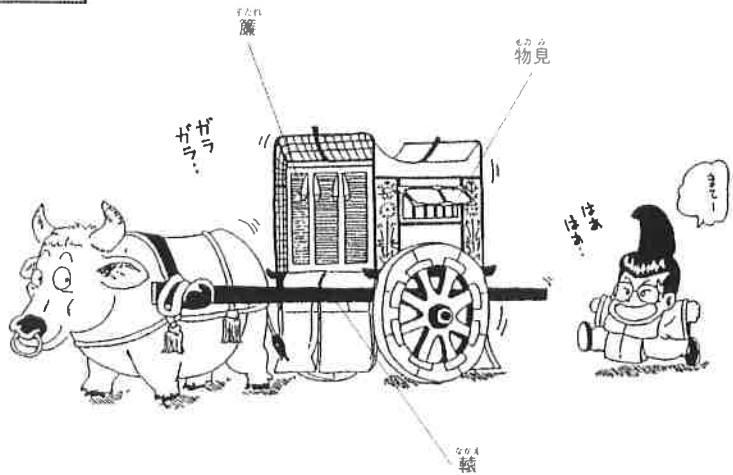
cf.

かひなし・せむかたなし・

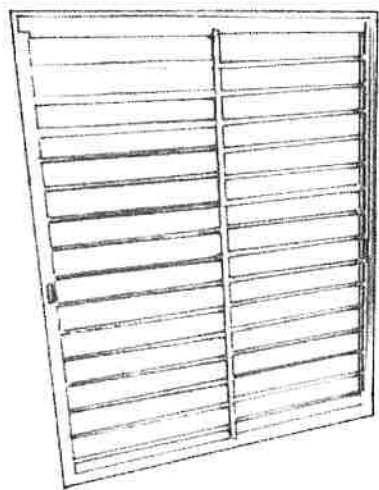
やるかたなし・すべなし【術なし】

ずちなし【術なし】

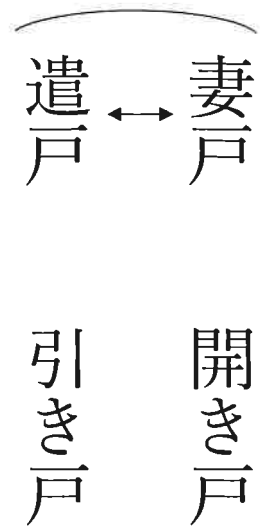
牛車



妻戸 つまど
外側に開く両開きの板戸。



遣戸 やりど
横に引き開ける引き戸。身分の低い女房にようぼうなどの部屋に使われる。



ながむ

【眺む】 ぼんやりともの思いにふける

【詠む】 詩歌を吟じる || 和歌を詠む・

(和歌・漢詩を) 口ずさむ

7 5 7 5

7 5 7 5

今様

今様^{いまよう}…七五調(たまに八六)を四回続ける

形態の歌謡

表 自然

裏 ← 心情(人間)

うつろふ 【移ろふ】

① 心変わりをする

② 色があせる

③ 場所が変わる

かる 【離る】

① 離れる・遠ざかる

② 心が離れる

かれ

枯れ
離れ

めづ【愛づ・賞づ】(動)

① 感心する・賞賛する

② 愛する・かわいがる

③ ほめる

← めでたし(形)

① すばらしい

② すぐれている

③ 立派である

④ 美しい

〈省略〉

とぞ
となむ
とや
とか
とかや

（言ふ）の省略
まれに（聞く）の省略

とこそ

（言へ）の省略
まれに（聞け）の省略

にや

にか

（あらむ）↓（デアルダロウカ）
デアロウカ

（あれ）↓（デアル）

にこそ

（あらめ）↓（デアルダロウ）
デアロウ

あてなり 【貴なり】

いうなり 【優なり】

えんなり 【艶なり】

なまめかし

やさし 【優し】

優美である・上品である

本文通釈

刑部卿敦兼は見た目容貌（まあ、簡単に言ってしまうえば顔つきだよ）がたいそう醜い人であった。そ（北の方）の北の方（正妻）はきれいな人であったが、（北の方が）五節の舞を見物しましたところ、いろいろと美しい人々（これは男だよ・上達部や殿上人）がいるのを見るにつけても、まず自分の夫の見た目容貌の醜さが情けなく思われた。（北の方は）家に帰って、まったく口さえもきかない（まして）目も見合わせないで横を向いていた（または、いる）ので、（敦兼は）「しばらくは何が起こったのか」とわけもわからずいたところ、（北の方は夫、敦兼に対して）「しだいにいやさがつのつてはたで見ているも気の毒なほどである。以前のように一箇所にもいないで、場所を変えて住んでいました。ある日、刑部卿が宮中に出仕して（ようするに、宮中に仕事をしにいくわけだ）夜に入ってから帰ってきたのに（または、ところ）、客間（リビングルーム）に明かりさえもつけない（まして、出迎えなんかしない）、着物は脱いだけれどもたたむ人もいなかった。侍女たち（この家に仕えている召し使いの女たち）も皆、北の方の目くばせに従って顔を出す人もいなかったの、（敦兼は）どうしようもなくて車寄せの開き戸を押し開けて一人でぼんやりと物思いにふけっていたところ、夜がふけて静まりかえって月の光や風の音がそれぞれ一面に身にしみわたって、北の方（妻）に対する恨めしさも加わって（つらく）思われたままに、心をしずめて筆策（たてぶえ）を取り出して、その場、季節にあったふさわしい音に合わせて、

垣根の中に咲いている白菊も色があせるのはしみじみと悲しいように、妻の愛情が変わるのを見るのは、しみじみと悲しいことだ。私がついて付き合った人（北の方）も、このように垣根に咲いた白菊が枯れるように、あなたは私から心が離れていった。

と繰り返し歌ったのを北の方が聞いて（夫をいやに思う）心がすぐにおさまってしまった。（今様歌がすべてなんだよ。）それから格別にふたりの仲はすばらしく（まあ、円満に）なったとか言う。優雅な北の方の心であるだろう。